

江戸時代本屋の日記から

橋口 侯之介（誠心堂書店）

江戸時代の本屋の実情を知る格好の史料が残されている。寛永期から続く伝統ある京都の書林・風月庄左衛門が書いた明和九年九月（一七七二）から一年三ヶ月ほどの日記『日曆』である。

この日記は図書館学者の弥吉光長氏が元古書業者だった若林 正治氏の所持していた原本をもとに翻刻して紹介されたものである（『未刊史料による日本出版文化1』ゆまに書房、昭和六十三年など）。その原本は現在行方不明であるが、本屋の生の史料として貴重で、本屋の日常的な活動ぶりがわかって興味深い。拙著でも紹介したことはあるが（『和本への招待』角川選書など）、改めて江戸の本屋ぶりがわかるところを紹介しよう。

風月は京都でも草分けの書林で、寛永年間、二条通観音寺前で風月宗智として儒書を中心とした学術的な出版を始めて、この日記まで一五〇年続いていた名門である。

日記はその当主が日々の日常業務や家庭の出来事を細かく記述している。まだ若いので、先々代の当主が隠居として伏見に住んでおり、その指導を受けながら仕事をこなしていく。店には番頭以下多くの手

代・丁稚がおり、奥には女中と家族が住み込んでいる。名古屋にはここから独立した風月孫助という店があつて、尾張藩の御用を承っていた。その業務というのは多岐にわたっており、本の販売、出版、古本の売買などが主なものだが、同じ本を売るにしても、たんに店で売るだけでなく、今日でいえば通販にあたる一種の目録販売をするなど様々な方法で行っていた。出版も今日の出版社のようにのべつ幕無しに出し続けるということではなく、懇意な著者とじっくりつきあいながら息の長い本づくりをしていたことがよくわかる。

この店の最大の売上は、尾張藩・佐伯藩・小浜藩など当時盛んに収書活動をしていたところへの大量納入だった。そこで扱われる本はほとんどが中国からの輸入書である唐本だった。しかも、長崎から直に入ってくる本より、いったん市中に流通して再環流した古本が主体である。その必要な本を集めるために、頻繁に古書の市場を利用した。当時、京都では書林仲間が認めた公式の市（世利分会）が立つようになっていた。日記には「武介芳徳市二行」とあるように芳野屋徳兵衛のところでこの世利分会が開かれていて番頭に行かせたなどと出てくる。長崎から新規に輸入された（新渡）唐本の市は武村嘉兵衛方で開かれていたし、通鑑会、水滸会などという唐本専門の市があつたことも日記でわかる。

尾張藩へは名古屋の孫助を通して在庫目録を送り、そこから注文を受けた。納入するとすぐに数十両単位で入金があり、それが毎日のよ

うに続くことがあり、収益の柱になっていた。佐伯や小浜からは担当する藩士が京都に派遣されており、その人たちを通して納めた。

実務は番頭・手代にまかせ、主人はこうした流れを陣頭指揮しながらこなしていた。とくにおろそかにできないのは、同業者同士の関係の深さだ。仲間組織以外に、数名から十名くらいの規模の講が盛んだった。風月は日吉講、湖月講、夷講、万歳講などと称する講に加入して、月に二、三度それぞれの会合に参加した。講の役割は、第一に金融で風月は資金を融通する側として利息を得ていた。次に情報の交換、さらに板木の共同購入や古書の交換があった。そして無礼講の場でもあったから、宴席は夜遅くまで続いた。同業者とは商売敵でもあるが、相互の親睦と信頼を深める関係でもあった。江戸時代の本屋を単独の商店としてだけとらえてはその本質が明らかにならないということだ。

出版は収益上、メインの仕事ではないが、店の顔である。信用がつき、格が上がる。したがって、おろそかにはしていない。きちんと編著者、校訂者などとの信頼関係を築いていくし、相合板や講を通して同業者同士の結束も高めていく。さらに筆耕や彫り師（板木屋）などの職人と良好な関係を維持する努力もしている。そこから、諸経費の明細や出版の流れなどもよくわかり、江戸期の出版活動のあり方を知るには恰好の史料である。もつと利用されてしかるべきだと思う。

日記は飾らない文章で、当時の業界用語そのまま書き綴っている。人物たちも何の説明無しに登場してくるので関係がわからないなど、

容易に理解できないところもある。それでも読み進めていくと見えてくる実態がある。

店の仕事以外にも家族のこと、出入りの職人、親戚つきあいなども記述されている。子供の成長、季節の行事、法事など当時の京都の商人の民俗がよくわかる書きぶりだ。長男が生まれたときは、わざわざ別の家を六ヶ月間借りてそこで出産・育児をしている。熱を出したり、具合が悪くなると心配をするところなど家族へのいたわりも表れている。実にきめの細かい日記なのだ。接待や行事のたびに、どこで何を食べたかの献立まで詳しく記している。その点、現代のSNSにも似たところがある。

別に出版への苦情、番頭の不始末、支店の未払い問題なども重なり、心の休まる時がない。書林仲間の前行事もつとめており、業界のリーダーを指す一面も見える。経営者としての店主と家族を預かる主人が公私にわたって日記には描かれる。しかも日記は毎日その日にあつたことを時系列で淡々と記すのだが、それは忙しそうに見える。それでも現代のような慌ただしさやストレスはなく、むしろ発散しながら楽しく生きているように感じられた。

江戸期の本屋の日記としては、和泉屋庄次郎こと慶元堂の松沢老泉が書いた文政元年（二八一八）の九月から十一月までの日記『堂前隱宅記』というのもある（弥吉光長校『松沢老泉資料集』青裳堂書店、昭和五十七年）。別の機会にこれも紹介したい。